

## 「居場所」の観点からみた中学生の部活動に関する調査

安達空良 特定非営利活動法人キッズドア

古田 久 埼玉大学教育学部身体文化講座

キーワード：運動部、文化部、中学校

### 1. はじめに

中学校や高等学校に進学すると多くの生徒は運動部や文化部などの部活動に所属する。部活動に所属することで、目標を実現するために部員とともに練習に取り組んだり、部員同士で競い合ったり、休日も含めて多くの時間を共有して過ごす。そんな部活動の場を居心地が良いと感じ、自分の「居場所」だと考える生徒もいるであろう。他方、生徒によっては部活動で部員との関係がうまくいかず不登校になってしまったり、果てには自殺をしてしまったりする事例もある。したがって、部活動が生徒にとって「居場所」となっているのかを検討することも必要と考える。

部活動を対象とした研究は既に多く行われている。例えば、部活動と人間関係については、部活動では同じ目標や興味を持ち、共に多くの時間を過ごすことで部員同士が友人関係に発展しやすいことがあげられており、部活動に所属している生徒は所属していない生徒に比べ、友人関係が良いとされている(Eccles and Barber, 1999; 岡田, 2009)。さらに部活動への所属は学校生活への満足感を高めることや、部活動で要求される認知能力やソーシャルスキルが、クラスの文脈にも良い影響を与える可能性があるとされている(角谷・無籐, 2001; Darling et al., 2005)。これらのことから部活動への所属が友人関係や学級活動などの学校生活をより良くする効果があると考えられる。一方、部活動内でのいじめや部活指導者からの体罰やハラスメントが発生することもあり、それを苦にした生徒が自ら命を絶ってしまったり、不登校になってしまったりということが起きている。特に体罰等に対しては文部科学省(2013)が「運動部活動での指導のガイドライン」を公開したが、抜本的な問題解決には至っていない。

そもそも「居場所」とは何だろうか。「居場所」とは単なる人がいるところと辞書ではされている。しかし、人がよく言う「居場所がない」というような「居場所」には心理的なものを含んでいるという。杉本・庄司(2006)は、「居場所」の明確な定義はされていないが、構成概念としてその場所にいる他者やあるものの存在である「環境要因」と、その場所での個人の行動やそれに伴う感情といった「感情要因」に分けられるとしている。また、「児童生徒が存在感を実感することができ、精神的に安心できる場所」(田中, 1992)や「安心して身を置くことができる場所」(上野, 1992)、「ストレスの多い場から安心・安全を求めて避難する避難所」(比山, 2009)といった様々な「居場所」の定義がされている。これらの定義から「居場所」とは他者からの攻撃がなく、受容や承認、肯定されているという実感があり、自身を肯定的な存在と認識することができる場所だといえる。また、具体的な居る場所として自宅などの「家族といる居場所」、学校などの「友だちといる居場所」、他者とは関わらない「自分一人の居場所」に分類されるとしている(松田, 1997; 中村, 1998; 中村, 1999; 小畑・伊藤, 2003; 杉本・庄司, 2006; 堤, 2002)。部活動が

「居場所」として機能しているかも研究されており、「部活動は活動、仲間、顧問などの指導者という3つの要素により成立している。生徒が部活動に魅力を感じるのは、これら3つの構成要素から居心地の良さを感じることでできる居場所という空間がつけられ、それが生徒たちの心を満たしている」と部活動が「居場所」として機能していることが指摘されている(比山, 2009)。

以上のように、これまでも部活動と「居場所」に関する研究は散見される。しかし、調査対象を中学生に当てたものは筆者自身が調べた限り認められなかった。また、部活動に所属している人としていない人の比較だけになっている。そのため、中学生にとって部活動が「居場所」として機能しているのかに加え、運動部と文化部の違いも検討する必要があると考えた。

そこで本研究は、比山(2009)及び岡田(2009)の研究を参考に、運動部と文化部の違いも含めて部活動が「居場所」として機能しているのかを明らかにすることを第1の目的とし、運動部、文化部、無所属の生徒にとって学級が「居場所」になっているか、それ以外に「居場所」として機能している場所があるか明らかにすることを第2の目的とした。

## 2. 方法

### 2-1 調査方法

「学校生活と部活動に関する調査」と称して、無記名式の質問紙を作成し、某県のコミュニティセンターを訪れた中学生に配布し、回収した。配布する際は施設管理者の許諾を得た。また、配布をした生徒には自由回答であること、匿名制が担保されること、個人情報の保護を徹底すること等を説明し、回答してもらった。

### 2-2 分析対象

質問紙を回収できた200名の中から回答に不備のなかった175名の中学生のデータを分析に用いた(運動部男子50名、運動部女子54名、文化部男子20名、文化部女子33名、無所属男子6名、無所属女子12名)。

平成29年度運動部活動等に関する実態調査報告書(スポーツ庁, 2018)では、中学生の部活動への所属率は91.9%で、そのうち運動部のみへの所属率は70.6%、文化部のみへの所属率は19.0%となっている。それに対して本研究における全体の部活動所属率は89.7%で、そのうちの運動部のみへの所属率は全体の59.4%、文化部のみへの所属率は全体の30.2%となっており、文化部に所属している生徒の割合が比較的多かった。

### 2-3 調査期間

2020年10月1日から11月末日であった。

### 2-4 質問紙の構成

質問紙は、以下に示す個人の特性に関する質問、部活動についての質問、学級についての質問、居場所に関する質問の4つのカテゴリーの質問項目から構成された。

#### (1) 個人の特性に関する質問

性別、学年、部活動に所属しているか否か、また、所属している場合は部活動の名称を記述す

るよう求めた。

## (2) 部活動についての質問

比山(2009)の質問項目を参考に、部活動への参加に関する質問項目を作成し、「部活動が楽しいか」、「積極的に参加しているか」、「部員との関係」、「顧問の先生や指導者との関係」といった9項目で構成し、回答は「5. あてはまる - 1. あてはまらない」の5件法とした。

## (3) 学級と家族についての質問

比山(2009)の質問項目を参考に、学級内での質問項目を作成し、「授業が楽しいか」、「クラスメイトとの関係」、「担任の先生との関係」、「成績や勉強への不安」といった8項目で構成し、回答は「5. あてはまる - 1. あてはまらない」の5件法とした。

## (4) 居場所に関する質問

生徒が居心地が良い、安心できるという場所を明らかにするために「居心地がよい、安心できる場所の有無」、「学校内と家庭内の主な場所で居心地がよい、安心できると思うか」、「学校内と家庭内の人といると居心地がよい、安心できると思うか」の3項目、「回答した場所や人でなぜ居心地がよい、安心できると思うか」の1項目で構成した。前半の3項目は「はい-いいえ」の2件法とし、居心地が良い、安心できるという場所や人が質問項目以外にもある場合は自由記述を求めた。最後の1項目は自由記述とした。

## 2-5 分析方法

部活動についての質問と学級についての質問に関しては、性別を男女の2グループに、所属を運動部、文化部、無所属の3つにグループ分けをした。性別と所属を独立変数、部活動と学級についての質問(5件法)を間隔尺度扱いとして従属変数とし、2要因分散分析を行った。居場所に関する質問は回答と性別、所属でクロス集計し、 $\chi^2$ 検定を行った。統計的検定の有意水準は $p < .05$ とし、統計ソフトはIBM SPSS Statistics ver. 26を使用した。また、自由記述の回答はカテゴリ分類を行った。

## 3. 結果と考察

### 3-1 部活動についての質問

図1に質問項目「部活動に参加するのは楽しい」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 153)=2.055, p > .05$ )の主効果は有意ではなかったが、所属( $F(1, 153)=46.633, p < .001$ )の主効果と所属×性別の交互作用効果( $F(1, 153)=9.203, p < .05$ )が有意であった。所属については運動部よりも文化部の生徒の方が参加するのは楽しいと思っていない。交互作用効果については所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行った。分析の結果、運動部の男子と女子では差は認められなかったが( $F(1, 103)=1.975, p > .05$ )、文化部では女子より男子の方が部活動は楽しくないと考えているという結果となった( $F(1, 52)=7.382, p < .05$ )。

図2に質問項目「部活動に積極的に参加している」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 153)=6.801, p < .01$ )、所属( $F(1, 153)=58.14, p < .001$ )、所属×性別の交互作用効果( $F(1, 153)=11.462, p < .05$ )の全てが有意であった。性別では男子よりも女子の方が積極的に部活動に取り組んでいた。所属では運動部の方が文化部よりも積極的に取り組んでいた。

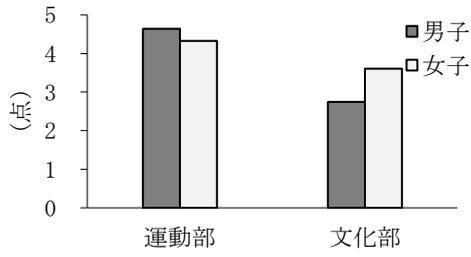


図1 参加するのは楽しい

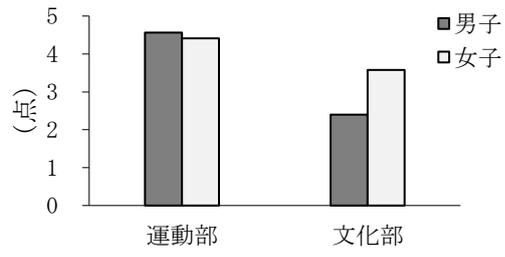


図2 積極的に参加している

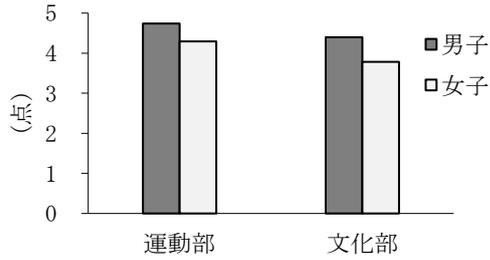


図3 部員と仲がよい

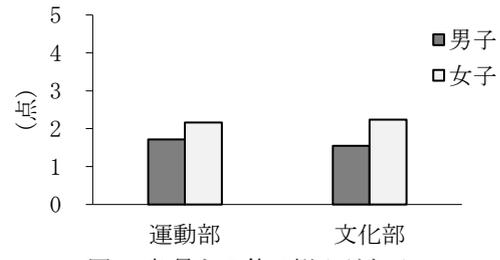


図4 部員との仲で悩みがある

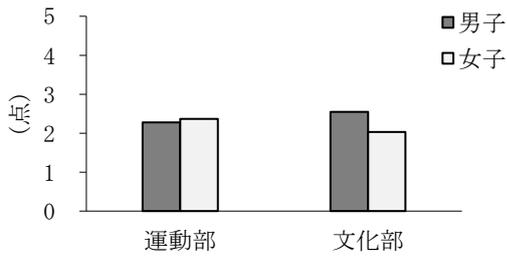


図5 上下関係が苦手だ

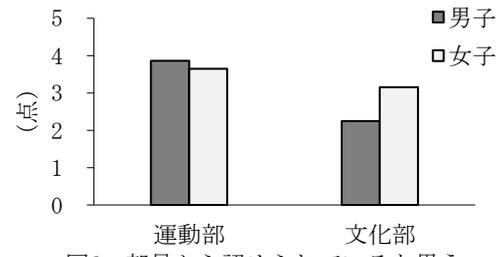


図6 部員から認められていると思う

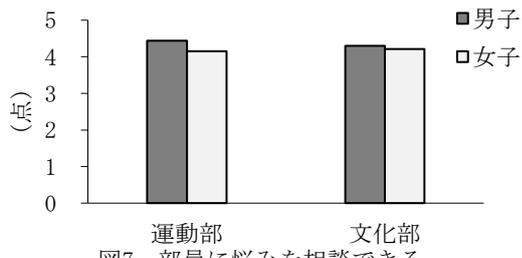


図7 部員に悩みを相談できる

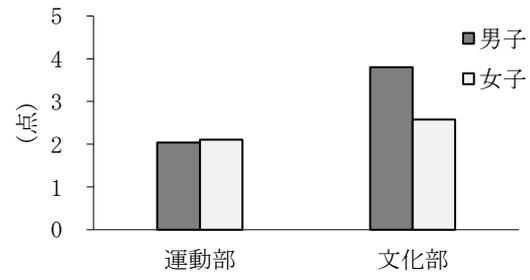


図8 顧問の先生との関係で悩みがある

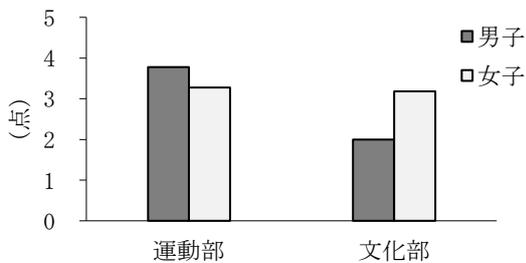


図9 部活動の場所が学校で一番好きだ

交互作用効果については所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行った。分析の結果、運動部の男子と女子では差は認められなかったが( $F(1, 103)=.467, p>.05$ )、文化部の男子と女子では女子の方が積極的に取り組んでいた( $F(1, 52)=13.288, p<.001$ )。岡田(2009)の結果では運動部と文化部での有意な差はないとしており、異なる結果となった。

図3に質問項目「部活動の部員と仲がよい」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 153)=9.249, p<.05$ )と所属( $F(1, 153)=5.972, p<.05$ )の主効果が有意であったが、所属×性別の交互作用効果は有意ではなかった( $F(1, 153)=.235, p>.05$ )。性別では女子よりも男子の方が部員との関係が良いとのことであった。所属では文化部よりも運動部の方が部員との関係が良いとのことであったが、岡田(2009)の結果では運動部と文化部で有意な差はなかったとされており、異なる結果となった。有意な差があったものの運動部も文化部も得点は高く、特に運動部は高いことから運動部の方が部員との仲を深めることができていると考えられる。

図4に質問項目「部活動の部員との仲で悩みがある」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 153)=5.997, p<.05$ )の主効果は有意であったが、所属( $F(1, 153)=.41, p>.05$ )の主効果と所属×性別の交互作用効果( $F(1, 153)=.279, p>.05$ )は有意ではなかった。性別については男子に比べ女子の方が部員との仲で悩みを抱えていたが、松田(2018)は人間関係の悩みの多さは性別による有意な差はないが、悩みの種類には差があるとされており、異なる結果となった。

図5に質問項目「部活動の上下関係が苦手だ」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 153)=.673, p>.05$ )と所属( $F(1, 153)=.018, p>.05$ )の主効果、所属×性別の交互作用効果( $F(1, 153)=1.359, p<.05$ )のいずれも有意ではなかった。岡田(2009)は上下関係について運動部の生徒、その中でも男子が上下関係を苦手にしていないと報告しており、異なる結果となった。

図6に質問項目「部活動の部員から認められていると思う」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 153)=2.185, p>.05$ )の主効果は有意ではなかったが、所属( $F(1, 153)=20.385, p<.001$ )の主効果と所属×性別の交互作用効果( $F(1, 153)=5.694, p<.05$ )は有意であった。所属では運動部の方が部員から認められていると思っているようである。所属×性別の交互作用効果については所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行った。分析の結果、運動部の男子と女子では差は認められなかったが、文化部の男子より女子の方が部員から認められていると思っていた( $F(1, 52)=5.524, p<.05$ )。

図7に質問項目「部活動の部員の中に悩みを相談できる人がいる」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 153)=.915, p>.05$ )と所属( $F(1, 153)=.37, p>.05$ )の主効果、所属×性別の交互作用効果( $F(1, 153)=.264, p>.05$ )のいずれも有意ではなかった。岡田(2009)は部活動の友人関係は性別や所属において有意な差はないとしているため、同様の結果が得られた。どの部活動でも相談できる程の関係の深い人を部員の中で作ることができていると考えられる。

図8に質問項目「顧問や指導者の先生との関係で悩みがある」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 153)=4.857, p<.05$ )と所属( $F(1, 153)=18.078, p<.001$ )の主効果、所属×性別の交互作用効果( $F(1, 153)=6.129, p<.05$ )の全てにおいて有意であった。性別については男子の方が顧問の先生や指導者との関係で悩みがあるという結果となった。所属では文化

部の方が顧問や指導者の先生との間で悩みを抱えていた。所属×性別の交互作用効果について、所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行った。分析の結果、運動部の男子と女子で差は認められなかったが( $F(1, 103)=.57, p>.05$ )、文化部は女子より男子の方が悩みを抱えているとのことだった( $F(1, 52)=8.101, p<.01$ )。岡田(2009)は顧問の先生との関係に性別や所属に有意な差はないとしており、異なる結果となった。

図9に質問項目「部活動の場所が学校で一番好きだ」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 153)=1.707, p>.05$ )の主効果は有意ではなかったが、所属( $F(1, 153)=13.01, p<.001$ )の主効果と所属×性別の交互作用効果( $F(1, 153)=10.484, p<.001$ )が有意であった。所属では運動部の方が文化部よりも部活動の場所が好きだという結果となった。所属×性別の交互作用効果については所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行った。分析の結果、運動部の男子と女子では差は認められなかったが( $F(1, 103)=2.876, p>.05$ )、文化部では男子より女子の方が部活動の場所が学校で一番好きだと考えているという結果であった( $F(1, 52)=7.64, p<.05$ )。これまでの回答結果から、運動部の方が部員や顧問や指導者の先生との関係が良好で、承認されていると感じられている結果となったため、居場所としての機能が高いと考えられる。

### 3-2 学級と家族についての質問

図10に質問項目「授業は楽しいと思う」の所属(運動部、文化部、無所属)ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 169)=9.037, p<.05$ )と所属( $F(2, 169)=13.388, p<.001$ )の主効果、所属×性別の交互作用効果( $F(2, 169)=5.239, p<.05$ )の全てが有意であった。性別については女子よりも男子の方が授業を楽しみやすいと回答している。所属についてTukeyの方法で多重比較を行った結果、運動部と文化部( $p<.001$ )で差が認められ、運動部と無所属( $p>.05$ )、文化部と無所属( $p>.05$ )では差が認められず、文化部が特に授業を楽しみやすいと回答していた。所属×性別の交互作用効果については所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行った。運動部の男女では差は認められなかったが( $F(1, 103)=0.226, p>.05$ )、文化部( $F(1, 52)=9.87, p<.05$ )と無所属( $F(1, 17)=4.233, p<.05$ )では女子より男子の方が授業を楽しみやすいと回答していた。比山(2009)は部活動に所属している生徒としていない生徒において有意な差はないとしていたため、異なる結果となった。

図11に質問項目「担任の先生との関係はよい」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 169)=2.414, p>.05$ )の主効果と所属×性別の交互作用効果( $F(2, 169)=1.01, p>.05$ )は有意でなく、所属( $F(2, 169)=3.08, p<.05$ )の主効果のみ有意であった。Tukeyの方法で多重比較を行った結果、運動部と文化部( $p>.05$ )で差は認められなかったが、運動部と無所属( $p<.05$ )、文化部と無所属( $p<.05$ )で差が認められた。部活動に所属している方が無所属よりも担任の先生との関係が良いと回答していた。このことから部活動に所属している生徒の方が担任の先生との関係が良いと考えることができ、比山(2009)及び岡田(2009)と同様の結果が得られた。

図12に質問項目「クラスメイトとの関係はよい」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 169)=0.323, p>.05$ )の主効果のみ有意でなく、所属( $F(2, 169)=25.46, p<.001$ )の主効果と所属×性別の交互作用効果( $F(2, 169)=3.774, p<.05$ )が有意であった。Tukeyの方法で多重比較を行った結果、所属では、運動部と文化部( $p<.001$ )、運動部と無所属( $p<.001$ )、

文化部と無所属 ( $p < .05$ ) で差が認められ、部活動に所属している生徒ほどクラスメイトとの関係が良いことが明らかとなった。所属×性別の交互作用効果については所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行った。分析の結果、運動部の男子と女子 ( $F(1, 103) = 0.162, p > .05$ ) と無所属の男子と女子 ( $F(1, 17) = 0.538, p > .05$ ) には差は認められず、文化部の男子より女子の方がクラスメイトとの関係を築けていた ( $F(1, 52) = 7.795, p < .05$ )。クラスメイトとの関係については性別に関係なく部活動に所属している生徒が良く、その中でも男子においては運動部の生徒が上手く関係を築けていることがわかった。比山(2009)と岡田(2009)は性別と所属において有意な差があり、性別では女子の方が、所属では運動部、文化部、無所属の順に得点が高く、交互作用効果は認められなかったと報告している。所属では同等の結果が得られたが、性別と交互作用効果については異なる結果となった。

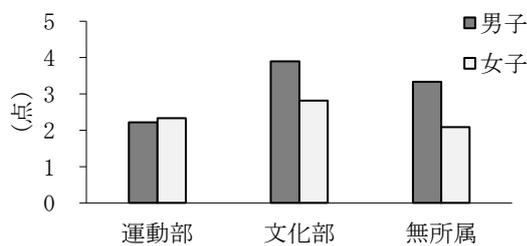


図10 授業は楽しいと思う

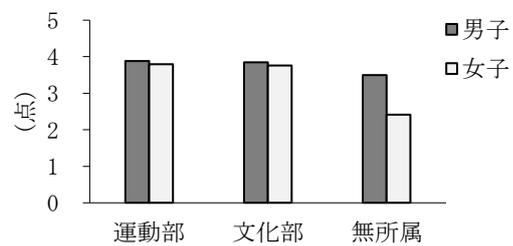


図11 担任の先生との関係はよい

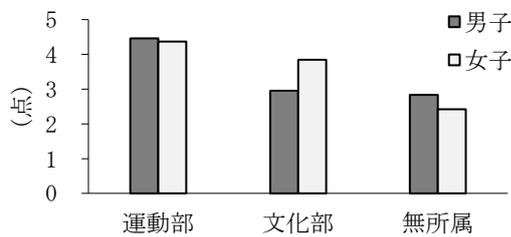


図12 クラスメイトとの関係はよい

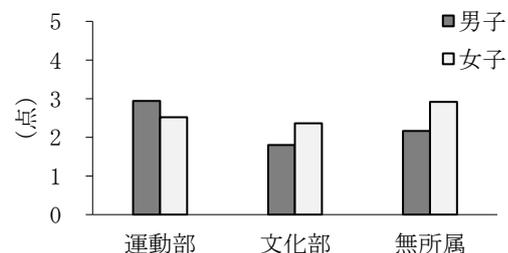


図13 勉強や成績に不安はない

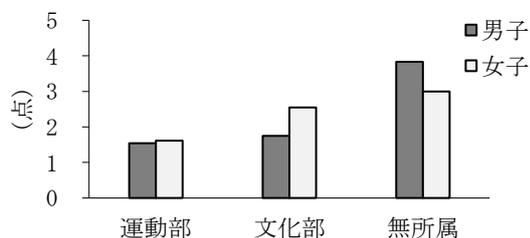


図14 学校に行けない日がある

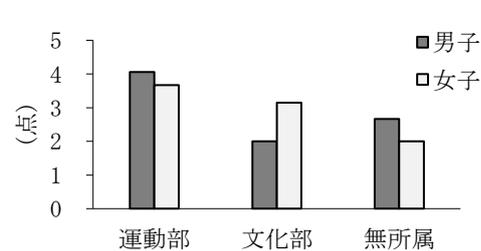


図15 クラスメイトから認められている

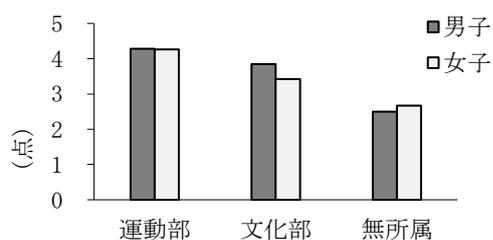


図16 クラスに悩みを相談できる人がいる

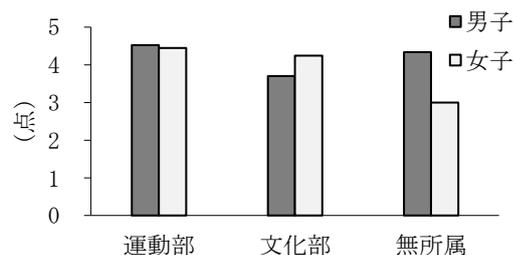


図17 家族との関係はよい

図13に質問項目「勉強や成績に不安はない」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別 ( $F(1, 169)=1.271, p>.05$ ) の主効果のみ有意でなく、所属 ( $F(2, 169)=4.158, p<.05$ ) の主効果と所属×性別の交互作用効果 ( $F(2, 169)=3.18, p<.05$ ) は有意であった。Tukeyの方法で多重比較を行った結果、所属では運動部と文化部の間でのみ有意な差があり、運動部の方が勉強や成績に不安はないという結果となった ( $p<.05$ )。交互作用効果については、所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行ったが有意な単純主効果は認められなかった (運動部: ( $F(1, 103)=2.717, p>.05$ ), 文化部: ( $F(1, 52)=2.330, p>.05$ ), 無所属: ( $F(1, 17)=1.325, p>.05$ ))。比山(2009)は性別や所属に有意な差はないとしており、全てにおいて異なる結果となった。

図14に質問項目「学校にいけない日がある」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別 ( $F(1, 169)=.002, p>.05$ ) の主効果と所属×性別の交互作用効果 ( $F(2, 169)=2.551, p>.05$ ) は有意ではなかったが、所属 ( $F(2, 169)=14.197, p<.001$ ) の主効果が有意であった。Tukeyの方法で多重比較を行った結果、運動部と文化部 ( $p<.05$ )、運動部と無所属 ( $p<.001$ )、文化部と無所属 ( $p<.05$ ) のそれぞれで有意な差が認められた。部活動に所属している生徒の方が学校に行くことができていると、その中でも運動部の生徒が学校に行くことができているといえる。比山(2009)は部活動に所属している生徒と所属していない生徒で有意な差があり、所属していない生徒の方が学校への不登校傾向が高いとしているため、同様の結果が得られた。

図15に質問項目「クラスメイトから認められていると思う」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別 ( $F(1, 169)=.016, p>.05$ ) の主効果のみ有意でなく、所属 ( $F(2, 169)=25.709, p<.001$ ) の主効果と所属×性別の交互作用効果 ( $F(2, 169)=7.759, p<.001$ ) が有意であった。所属の主効果についてTukeyの方法で多重比較を行った結果、運動部と文化部 ( $p<.001$ )、運動部と無所属 ( $p<.001$ ) で有意な差があり、どちらも運動部の方がクラスメイトから認められていると考えていた。交互作用効果については所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行った。その結果、運動部の男子と女子 ( $F(1, 103)=2.80, p>.05$ )、及び無所属の男子と女子 ( $F(1, 17)=1.239, p>.05$ ) では差は認められなかったが、文化部の男子と女子 ( $F(1, 52)=11.512, p<.001$ ) では有意な差が認められた。文化部については女子の方が男子よりクラスメイトから認められていると感じていた。

図16に質問項目「クラスの中に悩みを相談できる人がいる」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別 ( $F(1, 169)=0.118, p>.05$ ) の主効果と所属×性別の交互作用効果 ( $F(2, 169)=0.487, p>.05$ ) が有意でなく、所属 ( $F(2, 169)=12.613, p<.001$ ) の主効果のみ有意であった。所属の主効果についてTukeyの方法で多重比較を行った結果、運動部と文化部 ( $p<.05$ )、運動部と無所属 ( $p<.001$ )、文化部と無所属 ( $p<.05$ ) のそれぞれで差が認められ、部活動に所属してい

る生徒の方がクラスメイトの中に悩みを相談できる人がいることがわかる。その中でも運動部の生徒の方が悩みを相談できる人がいるようである。

図17に質問項目「家族との関係はよい」に対する所属ごとの回答の平均値を示した。分析の結果、性別( $F(1, 169)=1.779, p>.05$ )の主効果のみ有意でなく、所属( $F(2, 169)=6.515, p<.05$ )の主効果と所属×性別の交互作用効果( $F(2, 169)=4.769, p<.05$ )が有意であった。所属の主効果についてTukeyの方法で多重比較を行った結果、運動部と文化部( $p<.05$ )、運動部と無所属( $p<.001$ )で差が認められ、どちらも運動部の方が家族との関係がよかった。交互作用効果については所属ごとに性別を独立変数として1要因分散分析を行った結果、運動部( $F(1, 103)=0.130, p>.05$ )と文化部( $F(1, 52)=3.202, p>.05$ )の男子と女子では差が認められず、無所属では女子より男子の方が家族との関係が良いという結果であった( $F(1, 17)=6.214, p<.05$ )。比山(2009)は所属において有意な差はないとしており、異なる結果となった。

### 3-3 居場所に関する質問(場所)

性別については、すべての質問項目において有意な差は認められなかったため、詳細な検定結果の報告は省略する。

表1に質問項目「居心地がよい、安心できる場所がある」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差は認められなかった( $\chi^2(2)=1.020, p>.05$ )。この結果より、性別や所属に関係なく居場所はあるということがわかる。

表2に質問項目「教室は居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差は認められなかった( $\chi^2(2)=3.802, p>.05$ )。性別や所属に関係なく教室は居場所として機能しているが、あまり多くの生徒にとって居場所とはなっていない。

表3に質問項目「体育館は居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属によって有意な差が認められた( $\chi^2(2)=16.292, p<.001$ )。その中でも文化部と無所属の生徒にとって居場所として機能していない一方、運動部の生徒にとっては居場所として機能しているといえる。

表4に質問項目「部室は居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差は認められなかった( $\chi^2(1)=.639, p>.05$ )。部室の居場所へのなりやすさは性別や所属は関係ないということがわかる。本調査の結果では2割の生徒にとっては居場所として機能しているが、残りの生徒にとってはなっていないようである。

表5に質問項目「学校のトイレは居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差が認められた( $\chi^2(2)=10.188, p<.01$ )。多重比較の結果、運動部と文化部では有意な差はなかったが、部活動に所属している生徒と無所属の生徒で有意な差があった。無所属の生徒の回答が多くなっているため、学校のトイレは部活動に所属していない生徒にとっての居場所として機能しやすいと考えられる。

表6に質問項目「保健室は居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差が認められた( $\chi^2(2)=12.413, p<.05$ )。多重比較の結果、運動部と文化部で有意な差はなかったが、部活動に所属している生徒と無所属の生徒で有意な差があった。無所属の生徒の肯定的な回答が多くなっていることから、無所属の生徒ほど保健室が

居場所の機能を持ちやすいということが考えられる。今吉ら(2010)は性別に有意な差があるとしており、男子よりも女子の方が保健室を居心地が良いと感じているため、異なる結果となった。

表7に質問項目「自分の部屋は居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による差は認められなかった( $\chi^2(2)=3.480, p>.05$ )。このため、生徒にとって一人になれる自分の部屋は居場所となりやすいということがわかる。

表8に質問項目「自宅のリビングは居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による差は認められなかった( $\chi^2(2)=5.303, p>.05$ )。生徒にとって自宅のリビングは居場所となりやすいことが考えられる。

表1 居心地がよい、安心できる場所がある

	はい	いいえ	合計
運動部	99	5	104
文化部	50	3	53
無所属	18	0	18
合計	167	8	175

表2 教室は居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	41	63	104
文化部	13	40	53
無所属	5	13	18
合計	59	116	175

表3 体育館は居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	21	83	104
文化部	0	53	53
無所属	0	18	18
合計	21	154	175

表4 部室は居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	25	79	104
文化部	11	42	53
合計	36	121	157

表5 学校のトイレは居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	13	91	104
文化部	5	48	53
無所属	7	11	18
合計	25	150	175

表6 保健室は居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	15	89	104
文化部	14	39	53
無所属	9	9	18
合計	38	137	175

表7 自分の部屋は居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	69	35	104
文化部	41	12	53
無所属	15	3	18
合計	125	50	175

表8 リビングは居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	47	57	104
文化部	30	23	53
無所属	13	5	18
合計	90	85	175

表9に質問項目「自宅のトイレは居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差が認められた( $\chi^2(2)=8.742, p<.05$ )。多重比較の結果、表5の学校のトイレと同様に運動部と文化部の間に有意な差はないが、部活動に所属している生徒と無所属の生徒で有意な差があり、無所属の生徒ほど居心地が良いと思っているという結果となった。

また、居心地が良い、安心できる場所についての自由記述として「近所の公園」や「近所の公共施設」といった記述があった。

### 3-4 居場所に関する質問(人)

質問項目「家族といると居心地がよいと思う」を除く全ての質問項目において性別による有意な差は認められなかったため、性別についての詳細な検定結果の報告は省略する。

表10に質問項目「クラスメイトといると居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差が認められた( $\chi^2(2)=27.988, p<.001$ )。多重比較の結果、運動部と文化部、運動部と無所属、文化部と無所属で有意な差があり、部活動に所属している生徒ほどクラスメイトといると居心地が良いと感じていると考えられる。特に、運動部の生徒ほどクラスメイトといると居心地が良いと感じている。これは図12の結果で部活動に所属している生徒ほどクラスメイトと良い関係を築くことができていることと同様の結果といえる。

表11に質問項目「部活動の仲間といると居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差が認められた( $\chi^2(1)=9.934, p<.05$ )。多重比較の結果、運動部の方が部員といると居心地が良いと感じていた。これは図3の部員と仲が良いかという質問で、文化部の生徒よりも運動部の生徒の方が仲が良いと回答していることと同様の結果であるといえる。

表12に質問項目「担任の先生といると居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差は認められなかった( $\chi^2(2)=1.816, p>.05$ )。担任の先生といると居心地が良いと回答している生徒は少なかった。

表9 自宅のトイレは居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	23	81	104
文化部	14	39	53
無所属	10	8	18
合計	47	128	175

表10 クラスメイトといると居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	79	25	104
文化部	26	27	53
無所属	3	15	18
合計	108	67	175

表11 部活動の仲間といると居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	57	47	104
文化部	15	38	53
合計	72	85	157

表12 担任の先生といると居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	15	89	104
文化部	4	49	53
無所属	3	15	18
合計	22	153	175

表13 顧問の先生や指導者といると

居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	17	87	104
文化部	3	50	53
合計	20	137	157

表14 家族といると居心地がよい、安心できる

	はい	いいえ	合計
運動部	64	40	104
文化部	39	14	53
無所属	9	9	18
合計	112	63	175

表13に質問項目「部活動の顧問の先生や指導者といると居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。 $\chi^2$ 検定の結果、所属による有意な差は認められなかった( $\chi^2(2)=30.606, p>.05$ )。所属に関係なく顧問の先生や指導者といると居心地のよさを感じられている生徒は少ないようである。

表14に質問項目「家族といると居心地がよい、安心できる」に対する所属別の回答結果を示した。表には示していないが、 $\chi^2$ 検定の結果、性別による有意な差が認められた( $\chi^2(1)=4.451, p<.05$ )。男子よりも女子の方が家族といると居心地が良いと考えているが、図17の結果では家族との関係で性別による有意な差は認められなかったため、関係の良さと居心地のよさには違いがあるのかもしれない。他方、所属による有意な差は認められなかった( $\chi^2(2)=3.918, p>.05$ )。

また、どんな人といると居心地が良いかという質問において、自由記述の「その他」の回答として「大学生といった年齢の近い年上の人」や「学校外の友人」、「オンラインゲームのフレンド」、「親戚」、「ペット」などが所属に関係なく挙げられていた。その中でも特に多かったのは「オンラインゲームのフレンド」であり、居心地が良いと思えるような人に実際に顔を合わせていない人も含まれていた。松田(2018)は「ネットでは個人の匿名性が強いことから、コミュニケーションの相手を理想化し、自己呈示を最適化しやすいため、ネット経由でのやりとりは親密な関係がつくられやすい」としており、これを支持する結果であった。

### 3-5 居心地がよい、安心できる理由

表15は、居心地が良い、安心できると感じる理由についてカテゴリー分けしたものである。カテゴリーは他人との関係があるものに関しては「受容感」、他人との関係がないものは「プライバシーの確保」、どちらも含まれるものは「自然体」とした。サブカテゴリーとして杉田・庄司(2006)を参考にして「環境要因」と「感情要因」とした。これらから環境要因といった他人との関係に関する記述がどのカテゴリーでも多かった。環境要因の中に空間としての特徴のみというものはなく、空間にいる人も含めた環境に関する記述のみであった。「否定されない」、「自分をよく見てくれる」、「自分を認めてくれる」、「お互いに思い合っている」といったような他人から自分という存在を承認されるという記述が理由として多かった。自身だけの空間と自身以外の人もいる空間のどちらにも当てはまるものでは「気を遣う必要がない」、「ありのままにいられる」といった理由であった。

表15 居心地がよい、安心する理由

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な記述例
受容感	環境要因	否定する人がいないから(70名)
		自分を見てくれている人がいるから(48名)
		自分を認めてくれる人がいるから(125名)
	感情要因	お互いに思い合っているから(57名)
プライバシーの確保	環境要因	人からの目がないから(86名)
	感情要因	おびえることがないから(32名)
自然体	環境要因	気を遣う必要がないから(68名)
	感情要因	ありのままでいられるから(94名)
		人の目を気にしなくていいから(38名)

#### 4. まとめ

中学校や高等学校に進学すると多くの生徒は運動部や文化部などの部活動に所属する。部活動に所属することで部員と目標を共有して交流を深めて関係を築いていく。部活動を居心地が良いと感じ、「居場所」だと感じる生徒がいる一方、何らかの理由により部活動を居場所として感じられない生徒もいると考えられる。そこで本研究は、部活動が生徒にとって「居場所」となっているかを検討することを目的とした。中学生を対象に質問紙を配布し、回答に不備のなかった175名分のデータを分析した。分析の結果、運動部と文化部の比較では、運動部の方が文化部より居場所として機能が高かった。また、運動部では男女で違いは認められなかったが、文化部では女子の方が男子より居場所として機能していた。学級に着目すると、部活動に所属している生徒の方が所属していない生徒より学級も居場所として感じていた。その中でも特に運動部の生徒にとって学級が居場所として機能しており、総合的にみて学校への適応度が高い傾向が認められた。

#### 引用文献

- Darling, N., Caldwell, L. L., and Smith, R. (2005) Participation in school-based extracurricular activities and adolescent adjustment. *Journal of Leisure Research*, 37: 57-76.
- Eccles, J. S., and Barber, B. L. (1999) Student council, volunteering, basketball, or marching band : What kind of extracurricular involvement matters? *Journal of Adolescent Research*, 14: 10-43.
- 比山園恵 (2009) 「居場所」としての「部活動」についての考察. *人文論究*, 59(1): 209-233.
- 今吉このみ・長江美沙・五十嵐哲也 (2010) 中学生における教室と保健室の「居場所」としての心理的機能の比較 -学校享受感の視点から-. *愛知教育大学保健環境センター紀要*, 9: 45-52.
- 角谷詩織・無籐隆 (2001) 部活動継続者にとっての中学校部活動-充実化・学校生活への満足度とのかかわりにおいて-. *心理学研究*, 72(2): 79-86.
- 松田孝志 (1997) 現代高校生における居場所の内包的な構造. *筑波大学教育研究所カウンセリング研究専攻修士論文抄録集*: 31-32.

文部科学省 (2013) 運動部活動での指導のガイドライン.

[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/sports/mcatetop04/list/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2018/06/12/1372445\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/_icsFiles/fieldfile/2018/06/12/1372445_1.pdf) (参照日2021年1月13日)

中村泰子 (1998) 居場所イメージの発達的变化—○△□法の基礎研究として—. 児童・家庭相談所紀要, 15: 45-56.

中村泰子 (1999) 「居場所がある」と「居場所がない」との比較—○△□法の基礎的研究として—. 児童・家庭相談所紀要, 16: 13-22.

小畑豊美・伊藤義美 (2003) 中学生の心の居場所の研究—感情と行動及び意味からの考察—. 情報文化研究, 17: 155-167.

岡田有司 (2009) 部活動への参加が中学生の学校への心理社会適応に与える影響. 教育心理学研究, 57: 419-431.

杉本希映・庄司一司 (2006) 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化の研究. 教育心理学研究, 54: 289-299.

スポーツ庁 (2018) 平成29年度運動部活動等に関する実態調査報告書. スポーツ庁Web広報マガジンDEPORTARE 2018 <https://sports.go.jp/tag/school/post-13.html>, (参照日2021年1月14日).

田中智雄 (1992) 登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して—(学校不適応対策調査研究協力者会議報告). 教育委員会月報, 44(2): 25-29.

堤雅雄 (2002) 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱. 島根大学教育学部紀要人文・社会学, 36: 1-7.

上野ひろ美 (1992) 「居場所」(身体)と「関わり」(対話)—共同感情の組み換え—. 現代教育科学, 35(10): 28-30.

(2021年3月31日提出)

(2021年5月10日受理)

# **A Survey on Club Activities of Junior High School Students in Terms of “Ibasho”(Sense of Own Place)**

**ADACHI, Sora**

NPO Kidsdoor

**FURUTA, Hisashi**

Faculty of Education, Saitama University

## **Abstract**

When entering junior high school or high school, most of students belong to club activities such as athletic clubs and cultural clubs. By belonging to club activities, they share goals, deepen friendships, and build social relationships. Some students find club activities comfortable and "ibasho"(sense of own place). On the other hand, some students cannot consider club activities as "ibasho." The aim of this study was to examine whether club activities are "ibasho" for junior high school students. A questionnaire survey was conducted with 175 junior high school students (male=76, female=99), and the collected data was statistically analyzed. The results indicated the followings. (1) In the comparison between athletic clubs and cultural clubs, athletic clubs functioned more as "ibasho" for students than culture clubs. However, no gender difference was observed in athletic clubs whereas club activities functioned as “ibasho” for girls rather than boys in cultural clubs. (2) A classroom functioned more as “ibasho” for students belonging to club activities than for independent students. In particular, it became clear that a classroom functioned as “ibasho” for the students belonging to athletic clubs and their fitness for their schools is especially high.

**Keywords:** athletic club, cultural club, junior high school